

沈氏
新造
乘浪
發向
乘二
編
札



辛卯冬發行

半日庵芳津圃

能
新選系以鼓句集二編二
札
母坤

東京香同社花標

道
無
芭
心

言^ミてはてしなき河原に流るるなごほ
 はきりしは集りぬれり
 しつきの果つる書ふよせもら
 綾^一のなごほをたのむ
たろ
 名浪のいよりの浪のきろひ
 美^一のなごほをたのむ
 一

初編一目をく
よちよちおとす
おとす
かちす
 初編一目をく
集り
 貧乏の瘦法師

一經のしるしを
きく

来りて其の
しるし

きくしるしを
しるし



例言

- 本集編纂の趣意は去年の冬、癸卯の
初篇の緒言に述べたる通り、所々これ
省きたる記す寸前の冊子と合せ、其の宛
別蓋を以てしるす。
- 卷中、其海句の初篇の是とて、更
に別を以て撰む他者ハ舊より、其冊子
の別を以て撰む。其の宛別ハ、
人々の外に、其の宛別を以て撰む。其
宛別ハ、其の宛別を以て撰む。
- 世編より去年の秋、其の宛別を以て撰む。其宛別ハ、其の宛別を以て撰む。其宛別ハ、其の宛別を以て撰む。

篇の初めを以て其の著者の著ししなり今年
の神として上巻は編むべしなり一具著しし
老て益健なりと尋香上人の著しし
なり

○社名との生約不傷、毎是撰者の海句を加入
せしむる例とせしむるは下巻に添付して○押
さく福安ならぬと云ふは黄紙と云ふは一句を
脱漏せし甲某其粗忽と詰るは曰撰者の句
能く精神の入りたるは一躍して遊楽し
なりんと云ふは下巻なり

○先例の倣ひて近江流尾せし一歌仙の中より
し四巻と云はて撰の上するは神ありと云ふ

あつ磨りてそのまゝに連ねたるもの如く元より瑕瑾
ありしを其取捨の覚者の明を任す

○し冊子の元毎月兼題と云はて集めたる巻句
の内より撰りてたゞもたゞ大塚老翁の詩
油をも加へて月々に撰りて急連なり
紙もそのまゝに撰りて撰校の粗漏
書字が誤り或は仮名遣いホカありしは今完結
せしむる際し行心と云はれしものありし油たりと
ありしものも其のまゝに撰りて補ひたり

明治廿四年の事なり

風月如練

性下志

新選年浪發句集二編

上の巻

半日庵芳律選
芙蓉庵文禮校
一具庵尋香園

一日

見新おし	流ふ	一日の光う	うれ	三行	蓬	字
一日や	徳を	ゆまれ	人の	新	羽	後
一日と	ま	好ま	ま	あ	ら	く
一日の	せ	ら	の	つ	き	ら
一日は	耳	も	秋	鈴	も	先
一日や	夢	さ	ら	う	ら	う
				も	お	申
				+	勝	
					祥	
					蘭	
					柳	
					本	
					風	
					下	
					松	
					雨	

一日ハ膳のうききり日ありら季 末末 箭浦
 一日ハ午膳のうききり日ありら季 末末 箭浦
 一日ハ物々 頓着せぬ日 寸芳
 一日ハもの喜のうききり 武花 原蒼
 一日ハ戸毎のあまの笑ひ 武花 案山
 一日ハ笑ひ 丁仕舞 楽友
 一日ハ舞 上毛 多我
 一日ハ禱 信濃 晴月
 一日ハ 越後 貫山
 一日ハ 磐城 空海
 一日ハ 磐城 竹

一日ハ 豊前 好言
 一日ハ 豊前 花雄
 一日ハ 豊前 芝山
 一日ハ 豊前 淇園
 一日ハ 豊前 芳律

初稿

一日ハ 末末 丹蒼
 一日ハ 末末 全
 一日ハ 末末 寸芳
 一日ハ 末末 白人
 一日ハ 末末 梅林
 一日ハ 末末 永嘯

時々々々人々ある事——とら務上毛
 啼ううもわらわ務うれ——神鳥 越後 磐山
 吾々の年 纏くまへく神うらす 越後 有井
 初務 東山うらうらとらうらうら 室海
 小里よあまのまへまへく神務 羽前 五生
 常々うらうらまへまへく鳥 羽後 聽泉
 初鳥うらうらうらうら計うれ 務 梧風
 余のまへまへく初務、 務 奇川
 まへまへまへく初務、 務 獨水
 首の打ハ丁子下 立々初務、 務 里山
 初務——うらうらうらうら鳥 務 湛園
 初務のうらうらうらうら初務、 務 左

羽音も傳はさうれ——初務 羽前 轉鶴
 鳥々々々まへまへれ——とらうらす 伊豫 吳音
 まへまへ——障のまの初鳥 豊前 晚翠
 初務まへ——初れうらうら務、 似 月
 初務うらうらまへまへ初うらす 周防 歲年
 初務の先々初うらうらとら鳥 武伊奈 文禮
 活々々々——白うらうら初務 文 芳 拜
 時々々々初うらうらとら鳥 鳥 文 禮

門松

門松七家力大—— 与儀 大坂 堂
 着々々々々々門松を懸く 伊豫 眠 多
 門松中及著々々々 新 了 記 吳 堂

新野のりり念ひつゝお松飾上法華堂 松飾
 門松を初子立ちり隣同士出代 蓮
 門松を根付しやう年際いり 桃
 門松を海名とすり通り町羽後 以
 門松や言を根付し了勢のまき 一
 門松や根付し海風もまきせし葉 柳
 門松の外小虫のほし新緑き 柳
 門松や立ちたれいよき枝の少り 桐
 門松や けしきや言を初る風情 獨
 門松や 陽多葉きせく松をさう 里
 門松や ぬき言の道みりりりり 徳
 立これいよきとくもいよき 松の文羽後 湛
 山泉山山水亭卜下香山史陵

門松 けしきとくもいよき 旭の華 信隆 盛
 門松 伸毛とくもいよき 枝起り 上名 呉 羊
 子代 くとくもいよき 催毛等も門の松 士 行
 門松 常とくもいよき 柳の文 常陸 如 風
 門松 常とくもいよき 遠入の葉也向 相模 其 山
 門松 浮世とくもいよき 小葉垣 東京 東 韮
 子代 子代流の如新子 門の松 松 琴
 門松 銭きや 風毛きとくもいよき 其 尤
 門松 飾とくもいよき 角屋敷 才 芳
 門松 根付しとくもいよき 雨の如 文 禮
 門松 船とくもいよき 外せき 芳 緯

蓬萊

蓬萊の流親所よりハミク
 蓬萊の 向くとも 雨も 雨も
 蓬萊の 結くとも 雨の 雨の
 蓬萊の 灯籠も 雨も 塗柱
 蓬萊の 雨の 雨の 軸の 轆
 蓬萊の 夢の 麻の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 正面の 羽後
 蓬萊の 旭の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の

大坂 流美
 伊保 二 袖
 豊前 蘇山 古
 羽後 黙史 栖
 弄月 静山
 里山 泉山
 聽泉 祥松
 島美

蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の

芳 律
 東 朝
 涼 蕙
 清 龍
 秀 子
 永 嘯
 島 美

雜煮

蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の
 蓬萊の 雨の 雨の 雨の 雨の

尾張 古
 東京 法
 古 松
 每 期

北
五

海山は香も盛なる。さしあつて
 おのゝつら度もある。雑草は
 下もくまていたく神の雑草は
 旅もあつて人さつていふ
 雑草は別々の物
 心もあつて人のさつて
 酒もあつて人の雑草は
 又さつて人の雑草は
 蓋もあつて人の雑草は

上毛 我
 陸中 花爾甘
 羽後 秀川
 豊前 聽泉
 武蔵 美山
 尾代 文礼
 豊前 芳官
 安藝 文礼
 豊前 未院
 安藝 園

左 著

左 著 中 芳 一 いも子 名 一 あつれ
 左 著 中 笑 顔 法 々 々 中 嫁 姑 上 毛 玉 嶺 年
 左 著 中 月 日 立 々 中 益 の 眼 尾 梅 我
 左 著 中 懐 の 子 中 持 たる 田 柳 新
 左 著 中 子 二 持 々 々 々 中 永 嘯
 左 著 中 老 々 々 々 中 好 々 々 中 美 柳
 左 著 中 多 子 供 々 々 中 皆 々 痛 尾 江 春
 左 著 中 春 々 々 中 世 々 々 中 好 々 中 芳 拜

年 玉

年 玉 中 従 弟 々 々 中 日 々 々 中 家
 年 玉 中 山 々 々 中 山 々 々 中 山
 年 玉 中 山 々 々 中 山 々 々 中 山

北
下

唯 風
 秀 川
 月 靜

年玉の糸舟の里うら 柳の 羽後 春
 年玉の 尾の言葉の 風 好
 年玉の 扇の 留の ちの 机 信 隆 法 梧
 子と雲と解く 年玉の 白の 信 隆 軽 雲
 年玉の 又の 柳の 如 風
 年玉の 算の 舟の ぎの 柳 相 模 花 月
 年玉の 扇の 意の 蘇の 上 法 吾 柳
 年玉の 指の 意の 蘇の 何 襟 高 弁 柳
 年玉の 昔の 昔の 右 左 豊 前 梧 柳
 年玉の 祥義の 右の 首の 也 柳 聡 象
 年玉の 手短さの 由の 意の 義 隆 上 毛 物 我

此山

舟篋の年玉の 也 意 信 柳 柳
 年玉の 水の 派の 子 結の 柳 氏 若 拈 羊
 年玉の 数の 得意の 得の 子 法 珍
 年玉の 白の 意の 柳の 意 紫 山
 年玉の 柳の 意の 柳の 意 祥 松
 年玉の 柳の 意の 柳の 意 文 禮
 年玉の 柳の 意の 柳の 意 芳 律

帳絨

帳絨の 帯の 指の 将基の 二 柳
 帳絨の 柳の 柳の 柳の 柳 暁 翠
 帳絨の 柳の 柳の 柳の 柳 祥 松
 帳絨の 柳の 柳の 柳の 柳 素 白

此山

帳緞巾 手信ひ人も信信備代
帳書巾 糸くさくさ切き筆あたり
帳綴巾 片くさやうなる人あたり
とく程巾 綴れハき 帳の筆
帳緞巾 裁巾屑綴を袋きぬやう
綴上てぬく 帳の巾あたり

若菜

さくさく 氷の若菜うき
隣りらと糸くさ切き 若菜
言の餅も程ひ とうなる
綴巾あたりやきく若菜綴
綴り言を切くてもきくとうなる

尾張 瑞 芳 金 其 貫 蘭 唯
備 檉 桃 守 逸 友 氷 電
尾張 瑞 芳 金 其 貫 蘭 唯
備 檉 桃 守 逸 友 氷 電

若少くぬき腰も曲らぬ若菜つし
糸くさ切き 若菜
秋らき 若菜
笑みもつし 若菜
降るも子袖ひちて 若菜
糸くさ切き 若菜
若菜つし 若菜
袖子入る風も 若菜
若菜つし 若菜
若菜つし 若菜

楽 友 林 華 我 人 琴 雨 一 旆 泉 白 泉 風 泉 月 野

揚多けて言を降らるる若葉は
若葉の餌の夢をささるる
襟の目揚傳きて暮るる若葉は
平生もいらぬいふ言をささるる若葉は
心はゆたかほ夢のしらや若葉は
心は揚て揚傳きて暮るる若葉は

豊前

唯風 黙史 未曉 眠香 士行 芳律

藪入

藪の中言葉の角
藪の中好く通くお眼の物
藪の中揺ささるるくくくくくく
藪の中竹のくくくくくく
藪の中ひひひひひひひひひひ

上毛

上野

儿堂 庫文 悟懐 如風 五生

藪の中言葉の角
藪の中好く通くお眼の物
藪の中揺ささるるくくくくくく
藪の中竹のくくくくくく
藪の中ひひひひひひひひひひ

東京

河内

藪外 術院 美山 似自 樂友 癖友 婦城 池岸 楷風 淇山

霧のや葉のうららかな 垣這ひ
霧のや葉のうららかな 垣這ひ
霧のや葉のうららかな 垣這ひ
霧のや葉のうららかな 垣這ひ

几中

紙書... 霧のや葉のうららかな 垣這ひ
紙書... 霧のや葉のうららかな 垣這ひ
紙書... 霧のや葉のうららかな 垣這ひ
紙書... 霧のや葉のうららかな 垣這ひ

吟 聽 芳 文 貫 如 文 池 金 文 如 貫 多
風 泉 律 禮 山 禮 鳳 山 禮 英 禮 岩 韻

か... 霧のや葉のうららかな 垣這ひ
か... 霧のや葉のうららかな 垣這ひ
か... 霧のや葉のうららかな 垣這ひ
か... 霧のや葉のうららかな 垣這ひ

寸 二 點 未 暮 艸 毳 四 聽 禧 梅 弄 吟
芳 神 史 曉 山 箕 林 泉 雨 如 山 風

人々の松子帯るやわかくる中
又見たり知恵を備へたる向う風
高川のよきまね紙書の上をこれ等

東風

少くもや新戸のわかれの清る東風
東風吹や松葉のあそぶ水の泡
舟を向へてあそぶ波の東風
夕東風吹や吹られて磯の酒の研
東風吹や流るるや都の音
東風吹や野のさそひく日人通へ
東風吹や獨り漏るる梅の水
東風吹やゆれんよ一信一舟

衛 堂 園
芳 音 律

上 也
卓 川
庫 文
儿 堂
士 行
晴 月
文 洗
拈 華
花 月

東風吹や先活きなり 不是なり

於 本

東風吹や向あつたる 柳の唇

里 山
風 泉

東風吹やあそぶあそぶの庭の音

若 白

東風吹や 固まる日知らぬ

梧 栖

東風吹や 赤く裸木の桐林

全 史

東風吹や 吹つた風 旅衣

岳 山

東風吹や 舟の 灯の揺る

似 月

東風吹や 身を浮ゆる池の鴨の羽

源 蕙

東風吹や 吹つた風 吹つた風

白 人

東風吹や 今知れぬ 一輪

文 風

東風吹や 吹つた風 吹つた風

文 風

東風吹や 吹つた風 吹つた風

文 風

東風吹也 涼葉の降り 龍吟山

春雨

晴るころは 春の雨 東京
かまひきき 藪の心 柳
春雨の降るや 春の雨
春の雨のあふら 春の雨
春の雨のあふら 春の雨
山里の夕飯と 春の雨
春雨の降るや 春の雨
春雨の降るや 春の雨
春雨の降るや 春の雨

芳 律

北山山

春の雨 春の雨 春の雨
春の雨 春の雨 春の雨
春の雨 春の雨 春の雨
春の雨 春の雨 春の雨
春の雨 春の雨 春の雨
春の雨 春の雨 春の雨
春の雨 春の雨 春の雨
春の雨 春の雨 春の雨
春の雨 春の雨 春の雨
春の雨 春の雨 春の雨
春の雨 春の雨 春の雨
春の雨 春の雨 春の雨

黙 史 蘇 山 吳 寺 全 春 柳 以 常 梧 風 寄 下 柳 一 難 其

北山山

春雨や魚鱗もまじりて池
子さしゆく好人の如きも
降るまじりて静けり春の雨
春の雨温泉宿に別原をゆく
眠る春情もまじりて雨

春言

とまじりて旅人ならぬ春の言
庭名の如きも静けり春の言
降るまじりて静けり春の言
袖の如きも静けり春の言
花の如きも静けり春の言

春 魚 鱗 池
静 好 人 如 静 春 雨
温 泉 宿 別 原 春 雨
春 情 雨
旅 人 静 春 言
庭 名 静 春 言
降 静 春 言
袖 静 春 言
花 静 春 言

春の言静けり静けり春の言
静けり静けり静けり春の言
静けり静けり静けり春の言
静けり静けり静けり春の言
静けり静けり静けり春の言
静けり静けり静けり春の言
静けり静けり静けり春の言
静けり静けり静けり春の言
静けり静けり静けり春の言
静けり静けり静けり春の言

世侍素

春 魚 鱗 池
静 好 人 如 静 春 雨
温 泉 宿 別 原 春 雨
春 情 雨
旅 人 静 春 言
庭 名 静 春 言
降 静 春 言
袖 静 春 言
花 静 春 言

上三

上三

春山

暮るも夕暮きり
 花心指しおあはれ
 春の山下りる時
 美しき春の山
 名もれはる能き
 暮の山に写る
 望む春の山
 とき元中
 知多子
 陰うらも
 門くゆく

肥後
上毛
 三葉坊
 孝佳
 車川
 善我
 吳羊
 嘉峰
 淇山
 清梧
 以者
 梧風
 祐常

暮るも夕暮きり
 暮の山に写る
 望む春の山
 とき元中
 知多子
 陰うらも
 門くゆく

暮るも夕暮きり
 暮の山に写る
 望む春の山
 とき元中
 知多子
 陰うらも
 門くゆく

肥後
上毛
 三葉坊
 孝佳
 車川
 善我
 吳羊
 嘉峰
 淇山
 清梧
 以者
 梧風
 祐常

春海

月の四方角あはれ
 暮るも夕暮きり
 船も若く

月の四方角あはれ
 暮るも夕暮きり
 船も若く

月の四方角あはれ
 暮るも夕暮きり
 船も若く

肥後
上毛
 三葉坊
 孝佳
 車川
 善我
 吳羊
 嘉峰
 淇山
 清梧
 以者
 梧風
 祐常

揚子江の静けさ 相模の海

善の海 鳴門の海 蘇山

舟の帆のまはる 春の海 歳年

明と舟のまはる 善の海 洪山

荒らりのまはる 春の海 柳寺

江の風 善の海 芳緯

蜺

揚子江の静けさ 嗑山

よりまはる 善の海 淇山

廣海 蜺のまはる 本風

山の静けさ 蜺のまはる 廟風

江の風 善の海 里山

陸中

揚子江の静けさ 蓮史

七美の中 蜺のまはる 美山

碑のまはる 善の海 悦翠

親のまはる 善の海 枯華

船のまはる 善の海 外華

陽宅のまはる 善の海 白人

心で傳へる 善の海 寸芳

物事のまはる 善の海 芳緯

陽 第

揚子江の静けさ 陸中 靜雨

物事のまはる 善の海 月靜

如きものまはる 善の海 榮子

陸中

陽をりや 庭を忘れし 花 鏡
陽をりの中や 雛鳴ゆ 鶯のさき
可なりぬ 少や 暮らすとらちの 屠心
陽をり共 立ちりり 汐の 引くあし
陽をりや 柳の 枝の 枝 靴橋
かきゆくや 竹の 葉の 葉 豆
陽をりや 屠心 控くあし 暮らす
陽をりや 踏ゆく 石の 石の 柳
かきゆくや 少の 立ちりり 鶯の 退くあし
陽をりや 少の 立ちりり 屠心 柳の 枝の 枝
かきゆくや 柳の 葉の 葉 馬
陽をりの 立ちりり 柳の 枝の 枝

以 考
一 左
梧 翠 風
葛 山 翠
五 生 美
菖 外 生
拈 寺 外
玉 庫 文 桂

五

陽をりや 陸子 上りし 池の 鳥
かきゆくや 少の 親を 留めし 鶯の 雛
陽をりや 汐の 引くあし 柳の 上
陽をりや もえの 仕立ぬ 紅の 裾
かきゆくや 香の 枝の 枝 水
陽をりや 野の 跡の 跡の 跡
陽をりの 暮らすとらちの 立ちりり 柳の 枝の 枝

一 樂
舟 瓢 友
舟 每 暮
文 禮 芳
芳 律 緯

東京

菖の葦

日漏りハ 庭を忘れし 花 鏡
かきゆくや 少の 親を 留めし 鶯の 雛
陽をり共 立ちりり 汐の 引くあし
陽をりや 柳の 枝の 枝 靴橋
かきゆくや 竹の 葉の 葉 豆
陽をりや 屠心 控くあし 暮らす
陽をりや 踏ゆく 石の 石の 柳
かきゆくや 少の 立ちりり 鶯の 退くあし
陽をりや 少の 立ちりり 屠心 柳の 枝の 枝
かきゆくや 柳の 葉の 葉 馬
陽をりの 立ちりり 柳の 枝の 枝

梧 希 翠 山 嘗
柳 崎 山 嘗

羽後

五

娘身のよきれぬ嫁や
さし伸て身味きき
袴のゆるゆるの
鏡の下はきききき

蒲公英

蒲公英や風ふれき船より
多んゆや繩の折たる舟の馬
蒲公英の繁き付り杖の先
たんゆや風そ障らぬ雲
蒲公英よ吹くまじり泡屑
地車の音の響くたんゆ
多んゆや眠るの月長如き

池 友 友
楽 友 友
文 友 友
著 友 友
供 園
来 曉
梧 栖
黙 史
梧 風
常 陸
雨 前
如 風

蒲公英や日如き雲の丘より
たんゆや道をかきぬ子の極極
多んゆや川うき牛の眠たき
蒲公英やたんゆの川
たんゆや煙る雨の雨
蒲公英やさし伸る道の上
著ききききききききき

蕨

音のしつたん花よ
折江の蕨とありぬ
杖程のしつたん蕨の折

文 禮
如 節
才 佛
池 岸
江 春
芳 律
文 禮
學 山
松 言
志 白

道へ出て歩ゆへなる。しらひは
 子鹿や箱根も産むらう合せ
 赤のくも伸るやうなる蕨のふ
 早蕨や汚しつゝもる温泉も拭
 さらひやる借届きし。しらひ
 山のふも海子書りし。しら蕨
 初蕨短くおれははなれり
 湯治する旨のしらひもや蕨お
 多如減もまじりておよきしらひは

焼野

雨林 焼野遊ま日ハ殊あり
 動う移安うえお焼野の終る子

里山 其山 文禮 樂友 拈華 法龍 笠舟 芳緯 柳本 下風

焼く焼く。空はく降るや雲の雨
 面より焼く終る。野中りあり
 雨脚の届く傳ふ。焼野う車
 舌にある山を眺む。焼野う車
 焼盛る野中り。日と星の光り
 林。しら焼野の末の石地帯
 言ひも傳ふ。しら焼野う車
 野を焼く。道。しら焼野う車
 焼く。しら焼野の。入江。う車
 焼野。しら焼野。焼野う車
 焼野。しら焼野。焼野う車
 焼野。しら焼野。焼野う車

於本

蘭雨 里山 風泉 好雲 老言 素外 全山 未院 儿堂 庫文

新ハ水のぬる流る焼世より
 隠えやうしあふ麻の焼世
 廣き野や焼くは留るまうし地
 言候のあらうまあり焼野哉
 瘦村のあふ先黒き焼世より
 懐く野小初と筋多記流るる
 竹居の雨多流る焼世より
 焼く目もたれぬりま心野面は

松の花

二 油
 松 隆
 菅 深
 清 流
 如 如
 如 如
 文 如
 芳 如
 唯 如
 月 如
 風 如

家柄と知らる門やま川の水
 官身の物より新よ松の花
 磯歩りして能き目くまら水
 馬帽子着く人の並ふ松の花
 其候下古の妻女ありまら水
 鞆立ちするん有る松の花
 翻れふ目知るまら水
 手拭信拂の床れやまら水
 宿所まをすりまら水
 懐くふらるもの水
 江川室のみまら水
 松の毛ちる水知らる水

時 五 巾 小 考 外 任 昇 吟 生 明
 二 松 隆 菅 深 清 流 如 如 如 如 文 如 芳 如 唯 如 月 如 風 如
 東京 古 菅 笑 歳 二 點 素 考 外 任 昇 吟 生 明

老の眉ひらく晴きく松の雪

红梅

红梅や 遠くもわくふ世帯好色
红梅の 影ひ 指さく 化粧部屋
红梅の 色もまもる 酒の縁
红梅や 花の 飾り 春の風情
红梅の 実も 実る 秋の物忘れ
红梅の 影も 影も つく 徳也
红梅の 影も 影も 燈の定
红梅の 影も 影も 燈の定
红梅の 影も 影も 燈の定
红梅の 影も 影も 燈の定

芳 律

唯 白

美 白

初 卜

祥 松

非 吟

概 壺

歳 年

淇 園

美 山

近 山

红梅の色もくらく月日の事

红梅の影もくらく影の白

红梅の昔もくらく冠の門

红梅の影もくらく影の月

红梅の影もくらく影の月

红梅の影もくらく影の月

红梅の影もくらく影の月

初梅

物忌の師く知りく川橋
雪もくらく好く 煙く初もくらく
踏み進み道もくらく 初梅
よの晴も 都入もくらく

安 春

花 海

笠 無

舟 落

安 南

約 篇

芳 律

唯 白

美 白

初 卜

祥 松

非 吟

概 壺

歳 年

淇 園

美 山

近 山

春 川

一 智

本 風

唯 風

芳 律

二五

二五

山の名にうつておもしろくも
落葉のふれもめでたし
未だ眼もよほおもしろくも
さきさきの木もあつた
豊後者も酒代もあつた
さきの木も忘れられぬ
人の言もあつた
日の中も生れられぬ
重福者のあつた
未だこれ一日早
幸に有卦も入日也
物撰も子のあつた

扇 柳 下 風
五 柳 下 風
士 柳 下 風
左 柳 下 風
孝 柳 下 風
儿 柳 下 風
似 柳 下 風
鶴 柳 下 風

踏傳もあつた
落葉のふれもめでたし
人心動もあつた
約束のあつた
神もあつた
招の中もあつた
深山路もあつた
ちんちんもあつた
多知もあつた
善もあつた

百子音

淇 素 如 嘗 豫 丹 柳 左 牙 文 雀
園 柳 風 谷 蕙 蕙 章 暮 章 律 禮 風



人の音も廣うも空やもくらく
 音もく日も知らぬ多く百千鳥
 旅の音も音も知らぬくもくらく
 旅の音も音も知らぬくもくらく
 旅の音も音も知らぬくもくらく
 旅の音も音も知らぬくもくらく
 旅の音も音も知らぬくもくらく
 旅の音も音も知らぬくもくらく
 旅の音も音も知らぬくもくらく
 旅の音も音も知らぬくもくらく

乙香

芳白花蓮児空如香扇梅洪
 緯人福史堂海鳳多風常山

家下 美人のよらぬ夢の如
 乙香の来くもくらくもくらく
 片もくらくもくらくもくらく
 実あるもくらくもくらくもくらく
 待船の候もくらくもくらくもくらく
 時もくらくもくらくもくらくもくらく
 時もくらくもくらくもくらくもくらく
 時もくらくもくらくもくらくもくらく
 時もくらくもくらくもくらくもくらく
 時もくらくもくらくもくらくもくらく

晚梧左岳時花清梅以法希嘆
 翠栖 言 明 女 雨 好 存 梧 峰 風

多物とてこれく小舟の蕨つや
葉柱の能くまの如き初乙香
それハとてききりらん飛つて
乙香ハ別原新あり小葉垣
はとてつとつとて指ゆる橋名
蕨の糸一やら扇守のこほれ
乙香ハとて通ひらんわらわ船

東京

多物 我
葉柱 我
それハ 里
乙香ハ 柳
はとて 全
蕨の糸 芳
乙香ハ 芳
通ひらん 律

雉子

鳴く雉子ハ牛の鹿子ハ野中
雉子啼ハ橋名初らんわらわ紀
腸ハもの強さね長ハ如雉子
走る雉子啼くきハ餅一野の夕

一 梅 學 五
香 初 山 生

雉子啼ハ桐油とて真なるの上
風流ハ春の鳥ハ啼きさす
雉子の多ク強きとてらんわらわ山
降さるらん空陸切ハ雉子の多
雉子啼ハる陸橋ハ裸山
き一啼ハまらわらわ江の氷
雉子啼ハとてききりらんわらわ
雉子啼ハ陸守の如く山
き一啼ハ陸守の如く山の雨
水とてつとつとてつとてつとて
きとてつとつとつとつとつとつ
雉子の啼く山とてつとつとつとつ

東京

禪 松
時 月
玉 桂
貫 山
空 海
栴 山
葛 美
晚 翠
花 祿
米 舟
其 友
鳥 友

雉子やうかたちのうらやうう山七宿
幸保のよき八音時を唱ふ
ゆきやうれきふせう〜

相模

文 芳 花
禮 律 月

蟀

巢のほれれはちかたちのうらやうう山七宿
幸保のよき八音時を唱ふ
ゆきやうれきふせう〜

二 似 員 卓 多 逸 風 唯
油 月 山 川 我 水 好 凡

巢のほれれはちかたちのうらやうう山七宿
幸保のよき八音時を唱ふ
ゆきやうれきふせう〜

若 文 池 拈 樂 吳
律 禮 岸 華 友 華

群蟲

蘇不を補ふるを
嫁入の息な日とて
ほくせき茶の香も涼
細やうはほくももあらん南り香
いそ 勵免 群を 細ありの 固のたえ

信 遜

逸 水 逸 清 唯
水 音 我 梧 風

群

鷹よりいそひ余りぬあつり誓
相方ふたりのいひの。蚕の糸
行脚ま借きせし奉り上り時
今年行つたしきりとして誓ひ
客のいひ借る中誓ひある時
いそひいそひいそひいそひ
道外方よりぬよ誓ひの南り年
玉の富よりいそひ誓ひの
帯解てある。糸よりぬよ誓
山誓ひ仰り強ひぬ誓ひ毒
誓ひの糸よりぬいそひ誓ひ

若 鮎

子 敵
種 吟
歳 年
未 曉
淇 園
默 文
呉 雪
花 月
如 風
拈 華
白 人
芳 律

鮎のむやう根の若き根より
若鮎の糸借ひ光り着る子
水よりぬいそひ誓ひの
若き糸よりぬいそひ誓ひの
石海よりぬいそひ誓ひの
沼よりぬいそひ誓ひの
月夜借る子誓ひの
糸よりぬいそひ誓ひの
昇る日如清浄の光る小鮎
沼よりぬいそひ誓ひの
若鮎や若き糸よりぬいそひ誓ひ
鮎の子とたかたそとと移る時

東京
子 敵
台 鞆
东 鞆
寸 芳
如 風
潮 園
淇 園
全 栖
梧 栖
時 明
芳 律
文 禮

雲子入る

雲子入るも 定る 旅のり
雲子入るも 離るも 水の面
雲子入るも 入るも 水の面
雲子入るも 入るも 水の面
雲子入るも 入るも 水の面
雲子入るも 入るも 水の面
雲子入るも 入るも 水の面
雲子入るも 入るも 水の面
雲子入るも 入るも 水の面
雲子入るも 入るも 水の面

江
武考

十 湖
作 仙
拈 華
儿 堂
士 行
玉 桂
如 鳳
其 山
一 梅
蘭 雨

雲子入るも 見ると 旅のり
雲子入るも 見ると 旅のり
雲子入るも 見ると 旅のり
雲子入るも 見ると 旅のり
雲子入るも 見ると 旅のり
雲子入るも 見ると 旅のり
雲子入るも 見ると 旅のり
雲子入るも 見ると 旅のり
雲子入るも 見ると 旅のり
雲子入るも 見ると 旅のり
雲子入るも 見ると 旅のり

本
清

山 好
山 好
山 好
山 好
山 好
山 好
山 好
山 好
山 好
山 好
山 好

行春

行春也 旅のり 旅のり

風

善の行いし人少しを 磯の磯
行書やうらうら海をに 磯の磯
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書よ 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ

相模 其山 史山 翠山 晚翠 柳並 木風 月靜 梧風 法梧
岸陸 几鼻 水音

北窓より 風通を 目や 善の行
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ

心簾

丁子湯の 白いさくら 一ま 草
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ
行書や 京中分ちて ぬくもふ

陸中 香靜 峰
如 學 初 梧 唯 芳 文 鹿 素
風 山 ト 風 風 律 禮 友 柳

侍るも方ぬるも色多しとてまゝに
 内弁を隔てぬりや青
 衣のまじり風に通ふも
 本音もあはれや世の中
 川と流るる浦の隈に
 昔程の心根も目立
 ぬはるるも多しとて
 掛し日ハ操りあはれ
 ぬもさしとて多しとて

更衣

柳 石
 衣 戎
 庫 文
 逸 水
 美 山
 黙 史
 梧 栖
 古 松
 芳 緯
 唯 風
 風 泉

更衣して来てまゝに
 了るも多しとて多し
 ぬもさしとて多しとて
 返るも多しとて多し
 舟もさしとて多しとて
 朝風もさしとて多し
 襟の羽もさしとて多し
 更衣して来てまゝに
 多しとて多しとて多し
 子もさしとて多しとて
 更衣して来てまゝに
 さしとて多しとて多し

志 白
 博 山
 學 嶺
 一 香
 五 生
 左 明
 時 月
 似 山
 美 山
 未 院
 點 史

地よりふる露はなれりし
音なりと降るらぬお雨の
落る露も面やさくらとく
引くをてゆく旅人か
露の音やきよさるも
露柳のつる雨ぬく
一本ははるも子
さくはははるも
露のひてせまうあ
あゝとれは露の
湧水のたかぬ
切りたてたはれ

常陸

如 貫 未 芝 歳 二 露 竹 好 扇 濤 梅
風 山 曉 山 事 袖 外 吟 雲 風 雨 市

露くはらひし
懐きんはらひし
露の葉の産り

若葉

柔ゆりし
花もよや
如うな
け静
降ゆん
流の音
嬉む
新風の
ふつら

産中

高橋

文 芳 禮 律
花 扇 女 生 孝
法 臨 臨 臨
里 以 五 花 法
蘭 里 以 五 花 法
風 泉 雨 山 孝
柳 栞 下

就壺の底の煙きくも若葉の春
若葉の春の煙きくも宮の柳に
温泉煙の如くも若葉の春
清色よ月を昇るや夕若葉
降るよ方退きし若葉の秋に
柳をよよあり安堵く若葉の
昇るよ月を昇るや夕若葉
ぬれ色よ山のゆりも若葉
冷くも軽風起る若葉の春
若葉吹く夜も若葉の春
池の魚泳ぐや若葉の春
老も春の掬ふ旅路や若葉の

常陸

左 祥 池 如 儿 卓 桃 眠 左 呉 只 晚
松 圃 風 堂 川 山 香 言 山 梨

山壺の底の煙きくも若葉の春
就壺の底の煙きくも若葉の春
舟のよ若葉の春の山
春生木あり若葉の春
新室の目せし若葉の春
朝の陽の如くも若葉の春
枯くも若葉の春
清くも若葉の春
眼の若くも若葉の春

東京

左 芳 左 香 花
哉 哉 哉 哉 哉 哉 哉 哉

知の苑

取の若くも若葉の春
卯花の若くも若葉の春

淇 月 山 静

卯の花や日和るを〜海山嵐れ
 卯の花や魚沼糸の川〜重く
 卯の花の雲をよまれ〜ゆきか
 卯の花や雪やきり〜あまの風
 卯の花の垣や連待つは〜笠
 卯のさきや月影重き〜秋葉
 卯の花の余命〜〜さき秋月
 卯の花や梅もさ〜くぬけ月影
 うのさきや月影さ〜ら秋の意ゆ
 卯の花や雪も及ぬけ〜秋の足
 卯の花や雪も及ぬけ〜秋の足
 卯の花や雪も及ぬけ〜秋の足

美山 約扇 文 涼 白 芳 文 近 地 怪 葛 如 松
 外 音 雄 山 文 狂 山 吟 怪 災 凡 号

卯の花や日和るを〜海山嵐れ
 卯の花や魚沼糸の川〜重く
 卯の花の雲をよまれ〜ゆきか
 卯の花や雪やきり〜あまの風
 卯の花の垣や連待つは〜笠
 卯のさきや月影重き〜秋葉
 卯の花の余命〜〜さき秋月
 卯の花や梅もさ〜くぬけ月影
 うのさきや月影さ〜ら秋の意ゆ
 卯の花や雪も及ぬけ〜秋の足
 卯の花や雪も及ぬけ〜秋の足
 卯の花や雪も及ぬけ〜秋の足

美山 約扇 文 涼 白 芳 文 近 地 怪 葛 如 松
 外 音 雄 山 文 狂 山 吟 怪 災 凡 号

短夜

半の短く短夜明る〜小窓の雪〜
 舟の短く短夜〜〜おひひりり
 結搦り短の明安〜〜松子月

法 森 嘘
 梧 峰 風

短歌や 夢の如く 中一と 留りし
 一 かの夜や 三つ 泊りの 音せり
 短歌や 夢の如く 中一と 留りし
 短歌や 夢の如く 中一と 留りし
 短歌や 夢の如く 中一と 留りし
 短歌や 夢の如く 中一と 留りし
 短歌や 夢の如く 中一と 留りし
 短歌や 夢の如く 中一と 留りし
 短歌や 夢の如く 中一と 留りし
 短歌や 夢の如く 中一と 留りし
 短歌や 夢の如く 中一と 留りし

一 風 泉
 木 風
 如 風
 五 生
 葛 山
 近 山
 未 曉
 美 山
 點 文
 梧 栖
 歲 年

接一 木ハ 伸て 短く なる 歌の 形
 短歌の 形を 詠 員 崔 一
 短歌の 形を 詠 員 崔 一
 短歌の 形を 詠 員 崔 一
 短歌の 形を 詠 員 崔 一
 短歌の 形を 詠 員 崔 一
 短歌の 形を 詠 員 崔 一
 短歌の 形を 詠 員 崔 一
 短歌の 形を 詠 員 崔 一
 短歌の 形を 詠 員 崔 一
 短歌の 形を 詠 員 崔 一

甚瘦

甚瘦の 形を 詠 員 崔 一
 甚瘦の 形を 詠 員 崔 一
 甚瘦の 形を 詠 員 崔 一
 甚瘦の 形を 詠 員 崔 一
 甚瘦の 形を 詠 員 崔 一
 甚瘦の 形を 詠 員 崔 一
 甚瘦の 形を 詠 員 崔 一
 甚瘦の 形を 詠 員 崔 一
 甚瘦の 形を 詠 員 崔 一
 甚瘦の 形を 詠 員 崔 一
 甚瘦の 形を 詠 員 崔 一

東京
 作 仙
 寸 舟
 米 舟
 芳 律
 多 我
 几 童
 吳 童
 二 童
 寓 外
 瀟 圃
 美 山

其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀

似月 如風 的鼻 花月 蘭雨 月將 淇山 里山 祥松 每友 其礼 文禮

草物

其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀
其府の神よき行儀

芳律 玉桂 士行 里風 初卜 素白 松号 凡好 花雨 守友

春うらぐ花柱の冷やひく人もの
廿夜の早う着るもくく草物
川風が吹裾うらくももの
瞬うらぐももの露りや草物
草物もくもく草物
何常りんも物着て来く如て
きゆても着るのあも草物
多物着て照立たり瞬の捷
けいもくもく流やももの
温鬼巡りの揃ひの曠も草物
ぬれて来りも物着るひく人物

虫

東京
如 拈 其 漸 晚 黙 二 素 桐 古 芳
風 華 山 園 翠 史 油 外 岳 松 律

船の舟の歌もものうれ夫も物
昔の舟の歌もものうれ夫も物
昔の舟の歌もものうれ夫も物
昔の舟の歌もものうれ夫も物
昔の舟の歌もものうれ夫も物
昔の舟の歌もものうれ夫も物
昔の舟の歌もものうれ夫も物
昔の舟の歌もものうれ夫も物
昔の舟の歌もものうれ夫も物
昔の舟の歌もものうれ夫も物

唯 以 梧 清 亦 五 逸 湛 全 芒 默 素
風 為 風 雨 風 生 我 園 山 文 幽

雨の日は候ふ客也 杜若
翠の葉く 花子 幸あり 燕子の
連を花のふらふふかきつと
よき折て 橋の音く 杜若
とありて 紅のいふきり 燕子也
降日とて 降日の 色也 杜若
晴とて 雨の借 咲く 燕子也

東京

花 袖

花袖針 一て 夢の 花袖を
紙帽 一て 夢の 花袖也 垣隈
酒肴と 砂肴の 居也 花袖の
先振る 膳の 花袖の 白ひり

是 似 歳 号 芳 文 一 遊 全 全 其
標 月 年 笠 律 禮 章 川 言

孟浪の 水も 白く 花袖の
借物也 序の 袖也 花袖の
茶の 湯 一 水に 花袖の 衣なり
衣なり 紗也 花袖の 衣なり 膳
下り 可き 袖の 衣也 香也 白く 概

東京

茨 花

花の 時 一 花の 衣なり
時とて 花の 白ひり 一 花の 衣なり
能く 咲て 衣なり 刺也 花の 衣なり
甘多し 蓮の 衣なり 花の 衣なり
川形に 蓮の 衣なり 花の 衣なり
葉の 衣なり 花の 衣なり 一 花の 衣なり

五 以 法 柳 柳 桃 芳 池 巾 涼 秀
生 存 梧 新 下 垂 律 岸 仙 蕙 谷

梅さきも咲くうららけの春の風を
音道にのこさるるも何れはらの花
尾眼きく日あふふらりぬ
る際もくはる道せば花は花
こま〜こぼれぬらうはらの花
それい〜こぼれぬらうはらの花
栗の花は月影はるる花の花

紫陽花

紫陽花のや庭も借保の朝の露
紫陽花のまもりたる朝の旭
紫陽花のや深庭の若戸の夕
紫陽花のまもりたる朝の露

桃山 約翁 箕南 作風 美山 黙文 芳緯 如鳳 歳年 凌雨 芝山

紫陽花のや長い盛りを雨の中
紫陽花のまもりたる朝の露
紫陽花のや庭も借保の朝の露
紫陽花のまもりたる朝の露
紫陽花のや深庭の若戸の夕
紫陽花のまもりたる朝の露

田

紫陽花のや庭も借保の朝の露

二油 儿書 文流 文柳 一里 秀谷 寸芳 芳律 文禮

尾張 瑞 錦

憫なるハハらんま田の中は家
山廻せ候月の名何れも青田の如
方高き如くもるん昇るま田の如
山まよひ倦て婦しき青田の茶
里ありや梅くちあるもあるま田
まよひくち梅くち日ぬめたるお田
村の富貴ふくむるま田のうき
旅百里とて来てはつらぬ青田の
眼のまよひやうき青田の如くぬ
笠の細解てまよひぬる青田の如
月まよひのかくれぬ細くま田の如
青田とてまよひくちつらぬる如く
著

尋 香
寸 芳
約 扇
一 虎
凡 好
木 鳳
素 白
梅 好
里 山
花 扇
光 書
拈 華

吟本

江の輪を果すしとるま田の
水何れしとるま田の青田の如
都府の如くもるん昇るま田の如

清水

篇列の審結て所は清水の如
余何れしとるま田の如くもるん
笑ひ顔くちしとるま田の清水の如
日知る色月しとるま田の清水の如
春の如くもるん昇るま田の如
先の如くもるん昇るま田の如
杜直てくち知るま田の清水の如
書くま田の如くもるん昇るま田の如

近 山
二 湖
芳 律
嘆 風
梅 常
本 鳳
招 常
五 生
時 明
柳 蓋
宜 海

不自由の里と云ふは清水の事
船より舟を夢ひよきる清水の
歌に独り流るる音のよきなり
お痛の人なり又遠く清水の事
官守舟米炊てみる清水の事
之を免して又春を清水の事
清遊をたゞしとゆや昔清水
野の清水りりの命と結ひたり
海も水濁りもよせぬ清水の事
昔もたも清水を廣く命なり
湧けり風も吹流る清水の事
深るれと燈のよき清水の事

貫山 櫛文 庫我 几堂 如風 菀月 文流 松韻 近江 常陸 武奈 伊奈

旅の義理は多き事なり
清色中々之を清水今限の庵に
歌も音なり心著る清水の事
清音と流るる音也 岩は清水
掬ふもたれぬ清水の事
清水より上まゝに清水の事
清ききききききききききき
毛と胸ひきききききききき
清音の玉をせきききききき
清り路を訓清きききききき
清む人か残れぬ清水の事

吳官 櫛栖 二油 未曉 似自 一章 白人 涼蒼 朱舟 文禮 芳律

雲の峯

籙

香ふはるる河系遠ややち峰
 野川よ水音を傳へ 雲の峯
 果のちまゝ海を根の ちまゝの峯
 于牽の油をさしゝるゝのちまゝ
 釣籠繩短くうらゝねやの峯
 伝橋のさうらゝえらゝり 雲の峯
 重なりはまゝのちまゝのちまゝ
 泡のさゝりぬの 走るゝちまゝのちまゝ
 川よちまゝ暮るゝるちまゝ 雲の峯
 その峯の月のちまゝのちまゝのちまゝ
 松を吹く風も絶えらゝり ちまゝの峯
 魚揚ぐ船腰 ちまゝのちまゝ

晴 電 蓮 好 空 五 柳 扇 淇 燕 月 晴
 月 電 史 電 海 生 好 風 山 峰 鶴 風

伝初のもちまゝのちまゝのちまゝ
 法系はぬら根をうらゝるゝのちまゝ
 川舟の傳える日あり ちまゝのちまゝ
 水香傳 舟あり 馬や ちまゝの峯
 降るゝちまゝのちまゝのちまゝのちまゝ
 雲のちまゝのちまゝのちまゝのちまゝ
 宿の端をえらゝるゝちまゝのちまゝ
 水子構むちまゝのちまゝのちまゝ
 峯のちまゝのちまゝのちまゝのちまゝ
 伝傳川 伝をさゝるゝちまゝのちまゝ
 をくまゝ傳ふるゝ峯の香や ちまゝの峯
 赤峯をさゝるゝ峯のちまゝ 雲の峯

芳 燕 常 小 淇 燕 雲 未 卓 玉 多
 律 友 溪 鼻 園 年 外 電 曉 川 桂 我

大方にぬらぬ勝ありやうの海

川狩

川狩に月を照らすらむと柄
川狩に魁らしきひし陽り
川狩の草花新しきせきりりり
川狩に人の泣きしをば涙
川狩に心と胸の月をばて疾る
川狩に刀をたふる世の母さ

羽後

文 禮
翠 山
潮 園
津 園
士 行
秀 谷
芳 律

晒井

さらさら井の音は音まじり
晒井に雇うらむまじり
さらさら井の子供のまじり裏に

晒 井
月 靜
油 卜

晒井やあたらき音まじり水の味
さらさら井を觸てぬやむきま
晒井や汲む水のけしきま
さらさら井は海に解き柳うら

井 仙
寸 芳
文 禮
芳 律

心さ

心を切れて水垂る時うら
涙のちとけしきまじり心さ
夢のちとけしきまじり心さ
水うらした湯上りの行か心太
涙のちとけしきまじり心さ
冷しと不二なる茶屋心さ
心を実多小柳さらさらうら

松 韻
湛 園
黙 史
美 山
梧 栖
左 華
拈 華

冷く来り味のやうく 心を
連を待らぬ本は新やうを
白糸の流つき出 好心を
水より流き味ありんを
松の葉は輪り香涼 名心太
暑も待水も冷 心太
是より味ありんを
小流く実きら

納涼

火の音は皆絶 了船名の納涼
納涼舟江子宿く月と並ひり
夕不二の系向子揺らきり暑

以 池 筭 寸 秀 古 其 芳
考 岸 甫 芳 谷 松 尤 律
唯 風 好 雨
聽 泉 下 柳 泉 二 晚 芝 似 吳 逸 物 葦 品 海 人

多傳拂ふ舞れ松葉や 納涼甚
灯の影も花も四條は川をこ
納涼舟とて揺らきり暑の門
月の色も岫の影もまみり
棹をこらえりや納涼舟
風入る襟の軽 夕きみ
藤の葉も月も涼きり
笑ひたり人のあつり納涼甚
香のるや隣あり毛きり暑
灯を消し風無きら納涼
縁先の納涼舟もや井と月
隣のと隣合せり納涼甚

東京

聽 泉 下 柳 泉 二 晚 芝 似 吳 逸 物 葦 品 海 人

才の勤多きまゝにて嬉し夕物涼
也 ぬけの物涼客あり 狸料理
湯上りの物持ひりり 出さるる臺
月おぼろきまゝくくく 物涼香

明後

菅 真 寺 芳
谷 車 川 律

昼 孫

暹島より来た病者なる午膳は
牛と降る雨の中より昼孫は
飼方も昼孫も牛の乳
汁のあるまじの昼孫の食は
ゆるゆるもまじの舟の昼孫は
あのゆるゆるの形にてゆるゆる
病者もさるる昼孫のまじ

唯 蘭 湛 五 時 牛
風 雨 梧 山 生 明 以

船長の昼孫はゆるゆるの風
流るる連結ゆるゆるの午膳は
普信儒の昼孫もゆるゆるのまじ
一寸まじゆるゆるの好漢度浦
船ゆるゆるの昼孫もゆるゆるの
起るゆるゆるの朝の午膳ゆるゆる
るゆるゆるの午膳はゆるゆるの
于物の濡れると起る午膳ゆるゆる
筆指ゆるゆるのゆるゆるの物
雷のゆるゆるのゆるゆるの
牛ゆるゆるのゆるゆるのゆるゆる

汗

葛 美 柳 山 祥 来 勇 吳 寸 法 牛 芳
山 松 曉 山 羊 芳 芳 風 律

川原へ出て流るる好肌の汗
 引く汗もついでに好肌
 汗柄もついでに好肌
 心向れゆく神馬も汗も人の中
 汗の香も好肌も好肌
 とわ汗も好肌も好肌
 唐阿も好肌も好肌
 珠粒も好肌も好肌
 峠廻りも好肌も好肌
 旅人も好肌も好肌
 都人も好肌も好肌
 橋も好肌も好肌
 流るる好肌も好肌

其 多 穠 露 漱 晚 黥 一 梧 貞 里 祥
 山 我 竹 外 圃 界 史 鳥 風 車 山 松

高橋

隣も好肌も好肌
 とわ好肌も好肌
 葉も好肌も好肌

芳 文 法
 律 禮 勢

折るる好肌も好肌
 喜も好肌も好肌
 竿の伸も好肌も好肌
 暮の粉も好肌も好肌
 折つた好肌も好肌

大坂 菅 笠
 芳 律 笠
 笠 律 笠

横

いたつらふ男く嗚子傳ふは
名を聲て遊ハ之初りの角力取
泪もろきハ年暮おとせ
袂うら尋く陸船の房のせて
汁を鯨も塩梅の能い
暫く六葉下す涼く舟
かきくは渡冬候際とれる毎
肉説を通り振れハ廊下は
時雨之——にゆく晴し月
轉りく端々早い何の白
三右の形りり大人程あり
新らき多木の陰は茂盛

律 笠 律 笠 律 笠 律 笠 律 笠 律 笠 律 笠

掃り候雪の白の赤の
永きりを水うらちらす靴の香
甜差町なら知れゆくさき
二人はるる六葉なかるい
啞の慈量とくは願は
白粉や紅粉を付もさうま前
田植湯とくくや中入込
葉切包のし海衣き風情之
馬車も腕車も神葉の供
勃うすハ金の力お汚敷石
換をせぬとく原をくみらし
陳米も賣てのけは月お秋

律 笠 律 笠 律 笠 律 笠 律 笠 律 笠 律 笠

律

律

樹子ふれくさす、天井
飾の虫か啼きふ、脚の袋袋
おれ下おれとされも瓦山
深付を懐け持とぬ、母茶碗
腰を切ける、股引うら
殊子あつろの強兵、旅の花
ぬきき運ぶき、流氷湖

笠 袷 笠 袷 笠 袷 笠

修りしつる、色々の桐の丸
神なくき、くまの、くまの

文 共

禮 袷

かり船渡舟の少、船風は
いらあつて、あつてあつて
旅人も往來せ、き、月廿秋
春さき、暮暮、小きゆら
苦菜苞を解く、本お子の、
山分限、くま、くま、
着あつろ、胸裏の、くま、
やき、くま、くま、
流り、くま、くま、
京子、くま、くま、
不長、くま、くま、
ま、くま、くま、

禮 袷 禮 袷 禮 袷 禮 袷 禮 袷 禮 袷

新戸様——尚書五九條の行る途
いそぎの追ひ車は——らん
ゆくりのく御幸觸きくは花盤
露のくれり家書は神
を降らぬかろく雪のこいへに
煮くても焼くも解きまじり物
減ちてあつ——とあつらふらち
弱くもえせん籬刀杖
形新瑞段君の御運のきこえよ
物に——痛きともいひまは
師を物り状も知くもまじり書
送つてあせ候所もいふ

律禮律禮律禮律全禮律禮律

迷ひ也——心の駒の總きれて
即菩提との中す知願
村雲の晴き候月をもちの照
サ秋の屋敷もあまの訓は
上りから下り築も傳ちり通
酒を飲めまきけり徳
宗修りお親をまじりも大なる
世に孫ら——死候古は海
有上り植てり——の長長者
里のま物りも細うら好春

律禮律禮律禮律禮律



